開 会 挨拶

京都府立大学 学長 築山 崇

皆さま、本日はこの「京都北山文化環境ゾーン」にようこそお越しくださいました。会場校である京都府立大学を代表して皆さまを心から歓迎させていただき気持ちをまずお伝えしたいと思います。

ただいま「京都北山文化環境ゾーン」と申し上げます。本日の会場である、京都コンサートホール、そして我が京都府立大学と京都府立植物園。そして旧京都府総合資料館を新しく開設するという事で現在工事中の京都学・歴史館。そして本学の附属図書館、京都府立医科大学の図書館。これらの施設が立地している京都北山エリアを「北山文化環境ゾーン」と呼んでおります。京都の最もポピュラーなイメージである“古都”などとはひと味違った新しい京都の魅力を、全国に、世界に発信するゾーンとして整備が進められております。このような場所で二日間にわたり皆さまと大学教育の重要な課題や、教育方法を巡って意義ある議論が交わされるということに、大変期待をしております。

本日のシンポジウムは、教養教育が全体のテーマになっております。1991年の設置基準の大綱化以降の20年余りの新しい形の教養教育の模索の後に、今日どのような教養教育が展開されつつあるのか、あるいは明日に向けてどのような中身を創造していくことが期待されているのかということが大学関係者の中にあると思います。ある意味、耳になじんだ

テーマではありますが、極めて現代的で重要なテーマだと思います。本日ご登壇いただきます林哲介先生は、京都府立大学、京都府立医科大学、京都工芸繊維大学という、府立・公立・国立、設置団体の異なる大学が共同で展開をしている教養教育の取り組みの中で中心にご活躍いただいている先生です。林先生が最近出版された著書の中で、教養教育はさまざまに改革が進められ、多様な工夫が重ねられてはいるが、何か欠けているのではないか、あるいは最も本質的な部分を欠いているのではないかという懸念がおりになるという部分が非常に印象に残り、共鳴いたしました。その本質的な部分、欠けているのではないかと思われる部分として、学生たちに対してわれわれ教員が、さまざまな教育手法に創意工夫を重ねて働きかけをしていくべきだと、おっしゃっておられます。言葉で言うとは簡単になってしまいますが、学生自身が押し付けではなく主体的に、創造的に、自らの教養を生み出していく営み、活動をつくり出すという中身になっているのだろうか。そういう問いかけと私は読ませていただきました。この問題は教育に限りません。昨日、本学で新任教員の研修会を行い、そこで共通して語られていたのが、近年の学生を見ていると、課題など、教員の指示に従って的確な学習活動をするという点では力を発揮してくれるのですが、学生自身の思い、感覚、問題意識を

持って活動をつくり出していくという点では非常にもの足りない。もっとチャレンジングに、あるいは多少荒っぽくても構わないので、自らの思いを表現するような学生であってほしいということでした。その声を聞きながら、もしかすると、小学校、中学校、高等学校、そして大学も含めて私たち大人世代、あるいは教育の責にある者がいろいろな問題意識を持ちながら子どもたち、学生たちに働きかける、その方法を工夫、努力を重ねることで何とか変えていきたいということやってきてはおりますが、あえて誤解を恐れずに言わせていただければ、条件を作りすぎてしまったり、用意を調べ過ぎてしまっている部分があるのではないかと。もし、そうならば、それは学生たち自身の、あるいは子どもたち自身の思いや気づきで、新しいものを探りながらつかみ取っていくという営みを妨げているのではないかと、という問題意識を、林先生の著書や新任教員の先生がたの声を聞きながら私自身は持っておりました。本日のシンポジウムでは、できれば私が申し上げたような観点も入れていただき、会場の皆さんと共にこれからの時代の求めに応える教養教育の創造という時間を共有できますことを大いに期待しております。

そして明日の分科会は、この会場の西南にございます新しい学舎で行われます。この学舎は建設に当たり、京セラ株式会社名誉会長稲盛和夫様からご厚志をいただいたため「稲盛記念会館」という名称になっております。

京都府立大学、府立医科大学、工芸繊維大学の三つの大学が共同で教養教育を展開するための施設として京都府に建設していただいたものでございます。このような場所を会場に、このフォーラムを開くことができることは、会場校として非常にうれしく思います。その分科会の中では本日の教養教育の議論も受けつつ、より広く今日の大学における教育内容や、高校について、現代の日本や国際社会の流れの中で双方視野に入れながら探究的な議論が展開されるのではないかと思います。ともすれば、近年大学に対してイノベーション、あるいは人材育成など、比較的短い単位のスパンの中で成果を求める声も強いわけがございます。そのような声にしっかり応えていくということも現代の大学の重要な責務であると思いますが、同時に大学は高等教育機関、学術研究の機関として、技術的な研究教育の営みを進めていくという重要な役割を担っていると思います。ですので、視野を広く取り、かつ現代の焦眉の課題に迫っていく。そのような議論が明日の分科会で展開され、我が国における大学教育の新たな可能性を開き、国際社会に発信していく豊かな内容が生まれる。今回のフォーラムがそのような機会になりますことを重ねて期待いたします。誠に粗辞ではございますが、会場校として皆さまへのお礼とフォーラムへの期待を兼ねたごあいさつとさせていただきます。どうか二日間よろしく願います。